



▲老人を背負って避難

背景

この話は、犠牲者ゼロ水害の住民行動の様子を体験談に基づいて描いたものです。平成13年(2001)9月5日夜から秋雨前線が停滞し、翌6日未明にかけて高知県西南部では集中豪雨が発生しました。降水量は、大月町で総雨量577mm、24時間雨量520mm、時間最大雨量110mmを観測するなど、記録的な大雨となりました。この水害は「寝耳に水」の危険な災害にもかかわらず、死者・行方不明の出なかった特徴的な水害でした。土佐清水市下川口浦の区長の行動から、一人の犠牲者も出ることがなかった要因をうかがい知ることができます。

アクセス 平成13年水害の碑 (宗呂川)

- 土佐清水市役所より西へ直線距離約12km
- 土佐清水市下川口橋南詰
- 緯度経度 北緯32度47分00秒, 東経132度50分28秒



平成一三年(二〇〇一)の高知西南部豪雨を体験した土佐清水市下川口浦の区長の体験談です。私は下町に住む友人から浸水の知らせを受け、すぐに区長場に入り、マイク放送で下町と中町に避難命令を出しました。それは、九月六日午前四時過ぎだったと思います。

各戸に避難を大声で呼びかけながら、河口にある水門を閉めるため消防団員三名と向かいました。水門にたどり着きましたが、水門を閉めるのを諦めました。集落内の各溝を通じて大量の水が川に流れ出していたからです。地区内住民の安全確保のため、消防団員と連携しながら、全戸を歩いて避難を呼びかけました。

その時、下町と中町では床下浸水、床上浸水までの家も多くあり、住民は次々と避難所に集まって来りました。消防団員は二、三人でチームを組んで住民の安否確認のために巡視していました。独居老人宅を訪ね、一人、二人と救助しました。懐中電灯を手に、しのつく雨と稲光りの中での声かけでした。

明け方になって下川口橋に流木や家具、布団、畳等がかかり、川の流れを完全にせき止める形となり、その水が集落内に流れこんできました。下・中・上の各町筋が川となり、見る見る内に民家の一階部分まで水没し、堤防は決壊し、船だまりの小舟は流され、車は目の前を何台も浮かんで消えていきました。

住民の安否の確認のため、明るくなった地区内を首まで水につかりながら、全戸に声かけをしました。道路の中央部分歩き、流れて来た三、四メートルもの竹を手にして、玄関や窓などをノックして回りました。

昭和四〇年代以降